

各水試発トピックス

平成26年度青函水産試験研究交流会議を開催

平成26年12月3日、青森県水産ビル（青森市）で「平成26年度青函水産試験研究交流会議」を開催しました。この「会議」は、津軽海峡を挟んだ函館水産試験場と（地独）青森県産業技術センター・水産総合研究所が主催する水産関係者向けの講演会で、平成9年度から隔年で開催しています。

今回のテーマは「ナマコ・ホタテ漁業の現状と研究の取り組み」で、函館水試からは「北海道におけるマナマコの人工種苗放流について」（酒井主査）と「噴火湾ホタテガイ養殖の課題と函館水試の取り組み」（金森研究主任）の2題の講演を行いました。ほかに「ナマコをめぐる水産業とその管

理の方向」と題した基調講演（水産総合研究センター中央水産研究所・廣田主任研究員）や青森からのホタテガイとマナマコに関する研究の取り組みの講演がありました。参加されたのは、青森、北海道の漁業者、漁業団体、関係行政機関など100名を越す方々で、とくにナマコについての関心が高く、質疑も盛況でした。

講演会に先だち、試験研究機関だけの「機関連絡会議」も開催しました。道総研からは函館水試のほか中央水試と栽培水試も参加し、主な実施事業の概要紹介や、最近のトピックスについての情報交換を行いました。

また、これとは別に、交流会議の分科会であるホタテガイ部会を12月11日・12日の2日間にわたって、函館水試が入居している函館市国際水産・海洋総合研究センターで開催しました。北海道・青森の研究機関のほか岩手、宮城の各県、北海道大学、東北大学からも参加があり、各県のホタテガイ養殖の現状と課題の取り組みについての報告や数多くの研究発表があり、懇親会も含め熱心な討論がありました。

（佐藤 一 函館水試調査研究部）

「ナマコ・ホタテ漁業の現状と研究の取り組み」
～平成26年度 青函水産試験研究交流会議・陸奥湾地区水産振興研修会～

日時 平成26年12月3日（水） 13:30～16:20
場所 青森市安方1丁目1-32 青森県水産ビル7階大会議室

- 開会挨拶（13:30～13:35）
（地独）青森県産業技術センター 水産総合研究所長
- 基調講演（13:35～14:20）
「ナマコをめぐる水産業とその管理の方向」
独立行政法人水産総合研究センター 中央水産研究所
経営経済研究センター 漁業管理グループ 主任研究員 廣田 将仁 氏
- 研究成果報告（14:20～15:50）
 - （1）ナマコ
 - 「青森県におけるマナマコ増殖の取り組み」
（地独）青森県産業技術センター 水産総合研究所
資源増殖部長 菊谷 尚久
 - 「北海道におけるマナマコの人工種苗放流について」
（地独）北海道立総合研究機構 函館水産試験場
調査研究部 主査 酒井 勇一
 - （2）ホタテガイ
 - 「陸奥湾ホタテガイ養殖の課題と青森水産総研の取り組み」
（地独）青森県産業技術センター 水産総合研究所
ほたて貝部 研究員 小谷 健二
 - 「噴火湾ホタテガイ養殖の課題と函館水試の取り組み」
（地独）北海道立総合研究機構 函館水産試験場
調査研究部 研究主任 金森 誠
- 質疑応答（15:50～16:20）
- 閉会挨拶（16:20）
（地独）北海道立総合研究機構 函館水産試験場長



各水試発トピックス

試験調査船「北辰丸」竣工式を開催しました

平成26年11月19日(水)に釧路市において、釧路水産試験場の試験調査船第三代北辰丸の竣工式を開催しました。

これまでの北辰丸は、主に太平洋海域において、サケマス、サンマ、イカ類等の資源調査や海洋観測に従事してきました。

第三代北辰丸は、新たに表中層トロール網を装備して、サンマ等の浮き魚資源調査の効率化を図るとともに、着底トロール網は、従来よりも深い海域での調査が可能となり、スケトウダラ等の底魚資源調査機能が強化されます。また、多層式超音波流速計や計量魚群探知機、全周ソナー等の音響機器を用いることにより、海洋環境調査や水産

資源調査が拡充されます。

竣工式は、道内の水産関係者約120名が出席され、盛大に挙行されました。最初に道総研丹保理事長から式辞が述べられ、釧路水試高柳場長から工事経過の報告がありました。また、来賓の北海道知事、北海道議会議長及び北海道漁業協同組合連合会会長からのご祝辞をいただき、祝電披露、北辰丸乗組員の紹介もありました。さらに、竣工式に引き続いて新船披露と船内公開も行われました。

今後も、新北辰丸を活用した調査研究に取り組み、本道水産業の発展に努めていく所存です。

(中明幸広 釧路水試調査研究部)



写真1 岸壁に接岸した北辰丸



写真2 式辞を述べる丹保理事長



写真3 新船披露のテープカット



写真4 船内公開で乗船する出席者

各水試発トピックス

汽水域研究会2014年（第6回）網走大会に参加して

平成26年10月4～5日に網走市の東京農業大学で本研究会が開催されました。この会は比較的新しい研究会で、開催地が島根県から徐々に北上し、ついに道内の「汽水」の本場である網走市で行われたものです。「汽水」とは、沿岸や河口域の淡水と海水の混じり合うところです。「汽水」の水辺は、国内外問わず、古くから人々が生活する身近な場所です。それゆえ、汽水域は、近代の市街地化や工業化といった人為的な影響を強く受け、環境が大きく変化してきました。国内の汽水域は各地で地域の特色ある漁業が営まれています。いずれの漁場も人為的な要因による環境負荷が問題とされています。本研究会の趣意には、関連する研究者や研究機関等が連携し、全国の陸水や内湾を含めた汽水域で総合的な分野としての汽水域研究を推進するとあります。汽水の水産資源を維持するためにも、漁場の状況を詳しく知る必要があり、地学や古環境学等の情報は重要な資料となります。

さて、4日の研究会では、2つのセッションの講演とポスターによる一般発表がありました。講演では、「網走の汽水湖の生い立ちと年縞堆積物」セッションでTimo J. Saarinen 博士（トゥルク大学、

フィンランド）が基調講演を行い、他に3名が湖沼の堆積物と過去の環境変動の話題を提供しました。「二枚貝からみた沿岸汽水域の環境」セッションでは4名が登壇し、そのうち、渡辺智治研究主任（道東内水面グループ）が「網走湖のシジミ資源と変動要因」を、門谷茂教授（北海道大学大学院）がサロマ湖のホタテを巡る物質循環を講演しました。24題のポスターでは、島根大学や東京農業大学による汽水域の生物に関する研究事例が多く、網走市と網走漁業協同組合が研究支援や流域連携の取り組みを紹介しました。このポスター発表では、安富亮平主査（内水面研究グループ）が「天塩パンケ沼の基礎生産の特徴について」を、また、中島が「天塩川水系パンケ沼での覆砂とシジミの人工種苗の成長」を発表しました。

5日の巡検（野外視察）には加わりませんでしたが、晴天の下で網走湖にて行われたとのこと。本会では参加者が約80名と少人数のため、より親密な意見交換ができました。このような研究交流の場が、研究課題の実施と成果の普及に役立つと実感した一日でした。

（中島美由紀 さげます内水試内水面資源部）



写真 左：講演会場、右：ポスター発表会場（いずれも東京農業大学園田武大会幹事提供）

各水試発トピックス

「平成26年度水産試験研究プラザ」の開催

平成26年11月26日岩内地方文化センター、12月8日石狩湾漁業協同組合（以下「漁協」とする）の旧浜益支所、平成27年2月13日島牧村ふれあい交流センターで「平成26年度水産試験研究プラザ（以下「プラザ」とする）」を開催しました。当日は岩内郡漁協、古宇郡漁協、寿都町漁協、島牧漁協、石狩湾漁協及び北海道漁業協同組合連合会の漁業関係者や市町村役場及び北海道の水産担当職員の方々ら116名（岩内56名、浜益30名、島牧30名）に参加いただきました。事前に漁協からいただいた要望に応じて、ナマコの資源増殖、ホッケ、コウナゴ、ウニ、アワビ及びニシンの生態と資源状況、最近の鮮度保持技術など調査研究の成果を紹介しました。

意見交換では、漁獲量の回復に向けた資源保護と資源増殖に関して多くのご意見を賜りましたので、そのひとつを紹介します。浜益の漁業者は、刺し網で漁獲した大型の雄ニシンを船上で活け締めし、刺身用として主に本州へ出荷しています。

また、販売価格を維持するために、出荷数の上限を決めています。これに取り組む漁業者から、目合2寸1分の刺し網を用いて4年魚以上の大型のニシンのみを漁獲し、3年魚の多くは産卵させることで、資源の持続的利用を考えるよう提案がありました。また、各漁協が上述の網目サイズに揃えた場合、小型の3年魚の出荷数が減少し、販売価格が安定するという意見もありました。残念ながら、近年のニシン資源は安定しておらず、今年度は3年魚も漁獲対象とせざるを得ないようですが、漁業者によるニシンの資源保護や高付加価値の意識がかなり高いことが伺えました。

参加された方々に記入していただいたアンケートの結果から、次回開催や毎年開催の要望を多数いただきました。また、中央水産試験場でプラザを開催して欲しいというご意見も賜りました。試験場でのプラザ開催を検討いたしますので、その際は是非試験場へお越し下さい。お待ちしております。

（楠田 聡 水産研究本部企画調整部）



水産研究本部長の挨拶（上）と発表の様子（下、岩内）



意見交換の様子（上：浜益、下：島牧）